

山形・今塚遺跡

- 1 所在地 山形市大字今塚
- 2 調査期間 一九九三年(平5)五月～十一月
- 3 発掘機関 山形県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 須賀井新人・植松曉彦
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 四世紀・九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(山形)

今塚遺跡は、山形市街の北方約3kmに位置している。このあたりは馬見ヶ崎川扇状地の前縁部にあたる湧水地帯であり、遺跡は旧支流の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。

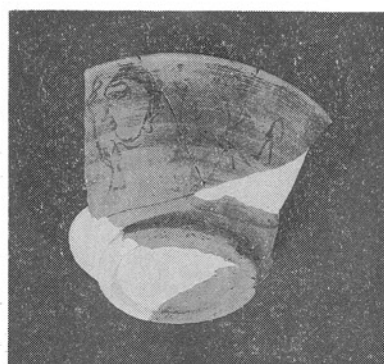
地目は一部宅地を含む水田地帯であり、標高約一〇二m前後を測る。

今塚遺跡の調査は、山形県住宅供給公社による宅地造成及び分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として実施

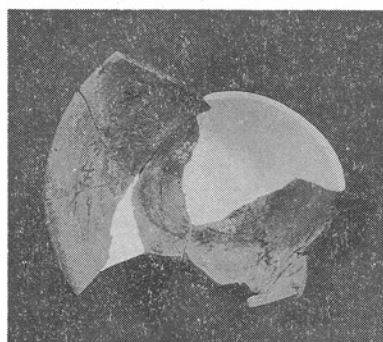
したものである。調査面積は一四二〇〇㎡である。

調査の結果、旧河川を中心に竪穴住居三〇棟・掘立柱建物九棟・井戸二基・土坑五三基・溝・畝など多数の遺構が検出され、これらに関連して整理用コンテナ一〇〇箱分の遺物が出土している。出土遺物から、遺跡は古墳時代前期と平安時代の複合遺跡であることが判明した。古墳時代では、旧河川の右岸から三〇棟の竪穴住居を主体に土坑や畝が検出された。竪穴住居は重複関係から三時期の変遷が認められ、このうち七棟が焼失家屋であり、東北地方南半の塩釜式に比定される古式土師器が一括して出土している。平安時代では、旧河川の左岸を主体に、掘立柱建物を中心として井戸や土坑、溝などが付随する。建物は二間×三間、三間×五間などの住居や倉庫と考えられ、一般的な集落の規模をもつものである。当該期の遺物には、土師器・須恵器・赤焼土器の他、地下水位が高い立地条件のため木製品の遺存状況が良好で、井戸や溝、旧河川などから、木簡をはじめ斎串・皿・碗・曲物・篋・下駄・紡織具・建築部材・矢形・錐形・刀子形などが出土している。その他の遺物には、硯と石製紡錘車が各一点ある。

木簡三点はいずれも出土地点が異なる。(3)は前述の旧河川(覆土最上層)、(2)はこの旧河川に南西から注ぐ人工的な溝、(1)は(2)が出土した溝と平行して走る溝(旧河川までは達しない)から出土した。(1)は共伴する土器が一点もないが、(2)(3)は九世紀半ば～後半に比定され



(外 面)



(内 面)

墨 書 土 器

